



教職大学院 Newsletter

No. 117

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2018.12.25

福井大学教職大学院と拠点校との連携に思う

福井県坂井市立丸岡南中学校長

松嶋 美治

1 丸岡南中学校の二つの学びのシステムについて

丸岡南中学校は、平成 18 年度に大規模校からの分離新設された中学校である。平成 14 年 6 月に設置した新中学校建設基本計画委員会では、教職員、生徒、PTA、地域住民のアンケートやヒアリングを実施し、意見・要望の収集や運営方式・施設構成などの検討を行った。その結果、基本方針として、すべての教科を専門の教室にし、生徒一人一人が主体的に考え行動するような教育環境で、オープンスペースや教材等を目的に応じて配置した教科センター方式の学校づくりを行うという基本計画を策定した。

教科センター方式では、生徒は授業ごとに各教科専門の教室へと移動して授業を受けることになる。また、各教科の教室の周囲には教科の資料やパソコン等で満たされたメディアセンターが併設されている。教科の教員も授業時間以外はメディアセンターにおり、生徒が休み時間に気軽に質問や会話ができるなど、生徒の学びに向かう積極的な意識や態度を育てる環境が整った。さらに、恵まれた教育環境を最大限に生かすために、1 年生から 3 年生までの異学年集団で構成されるスクエア制を考案し、生徒会活動、学校行事、給食や清掃など様々な学校生活の中心となるシステムとした。特に、スクエア制では、上級生が中心となって下級生への指導を行うことで、リーダーとしての自覚が生まれ、行事を終えたときの達成感を感じることができる。下級生は上級生の姿を見て未来の自分の姿を思い描くことができる。これらが脈々と学校生活の中に受け継がれて、学校文化の伝承が行われる土壌ができあがっている。

2 福井大学教職大学院との連携について

本校は、平成 20 年度から福井大学教職大学院拠点校となり、継続して教師を院生として送り出している。これまでに、6 名の院生が研究主任の立場で教職専門性開発コースにて学び修士号を取得している。現職で働きながらの学びは困難も多いが、学校内に新鮮な空気や新しい理論が持ち込まれ、特色ある二つの学びのシステムが活性化される。学校現場の実践について他の院生や教職大学院の教員とカンファレンスを行うことで、違った視点からアドバイスをを受けたり実践について省察したり、今後に向けての展望を見いだしたりすることができる。さらに、教職大学院で学んだことや刺激を受けたことを学校現場にリアルタイムに還元し本校教員とも学びを共有することが重要であると考えている。また、毎月の本校研究会「研究の日」や公開授業週間には、大学から教員が何度も来校して適切なアドバイスや現職教育で最新の教育動向について教えていただいている。

現在、教務主任の奥村弘美教諭が学校改革マネジメントコースで「地域とともにある学校づくり」をテーマに学んでいる。本校の在籍は 6 年目になり、教育課程全般に精通した教務の立場での教職大学院

内容

巻頭言 (1)

インターンシップ/木曜カンファレンス報告 (3)

ミドルリーダー・マネジメントコース便り (4)

11 月 月間合同カンファレンス報告 (6)

公開保育・公開研究会報告 (9)

2 月ラウンドテーブル案内 (16)

スケジュール (16)

での学びが、学校現場で大きな成果となっている。もちろん、学校改革マネジメントコースで学ぶ以上、学校長が示すスクールプランの実現に向けて、校長との綿密な検討が必要となることは言うまでもない。

また、インターンシップではストレートマスターの院生を受け入れている。長期間にわたり学校現場で一般教員と同様の校務をこなすことで、教師の職務の総体が体験でき、採用されて現場に出たときに、ある程度の見通しを持って教育活動に取り組むことができるという利点がある。

本校の特色ある二つの学びのシステムを有効活用し、さらに、進化発展させるには教職大学院と拠点校の連携する意義は大きいと感じる。未来へ良好な教職大学院との連携を継続させるために、途切れることのない院生やストレートマスターの院生の存在が重要である。学校現場から有能な院生が教職大学院で学び、そして、即戦力のある教員をめざす院生が学校現場で実務を経験する。このような連携が継続できるよう関係機関にご理解とご協力を強くお願いしたい。

3 自主研究発表会について

本校は、平成 18 年度の開校以来、3 年間を一区切りとして自主研究に取り組んでいる。平成 19 年度に第 1 回自主研究発表会を「教えやすい環境から学びやすい環境へ」の主題のもと開催し、恵まれた環境を活かした運営の工夫に力点を置いた研究を始めた。

平成 20 年度には、研究主題を「学びやすい環境の創造 ～喜びが感じられる授業をめざして～」と授業づくりに主眼を置き研究に取り組んだ。同年に、教職大学院拠点校となり、大学の教員との協働研究体制が確立した。

平成 21 年度から「学び合う環境の創造」という主題を設定し、教科を超えた教員グループによる研究を始めた。そして、生徒同志、教員同志、また生徒と教員が「学び合う」校風をつくりあげるべく研究が始まった。この「学び合い」をベースにした、小グループでの話し合い活動を授業に積極的に組み入れることによって、生徒同士の学び合いをさせるようにした。また、教員同士の学び合いも始めようと、複数教科で教員グループを形成し、お互いの授業を見合うようにした。その中で、今では定番となっている「教科の壁を越えた協働」というアドバイ

スを大学よりいただいた。さらに、本校の特色である教科センター方式を生かすメディアセンターの活用についても研究を行ってきている。

平成 24 年度からは、「学び合う学校文化の創造」、平成 27 年度からは「学び合う学校文化の創造 ～やりたいを喚起する方法の工夫～」、平成 30 年度は「学び合う学校文化の創造 ～学びに向かう力の育成～」と主題を設定し、積み重ねてきた研究の成果や課題を検証して、「学び合い」をベースに協働研究を進めてきて現在に至っている。

自主研究発表会の公開授業の授業づくりには、大学教員も協働研究者という立場でグループ参加してもらい貴重なアドバイスをいただいている。発表会当日は、県内外の教員や教職大学院の院生など多数の参加者を得ている。授業後の分科会でも、教職大学院での学びの中でヒントをいただいた小グループでの生徒の学びを追った分科会を行っている。生徒のつぶやきや表情などから学びの変化の様子の報告があり、それを語ることで生徒の変容を共有することができている。通常の授業研究会では気づくことのできない、深い学び合いができていた。

このように、本校は、拠点校として、教職大学院での院生の学びが学校現場に還元され、学校現場でもその学びが広がりを見せている。今後も、学校現場での実践と教職大学院での省察を繰り返して、より新しい可能性に挑戦するなど、質の高い教育を行っていきたい。

4 さいごに

「飲水思源」という古い中国の言葉がある。これは、「水を飲むときには、その井戸を掘った人のことを思い出しなさい」という意味である。

これまでに、本校のために、多くの先人に井戸を掘っていただいた。その井戸からは学校文化という水が湧き続けている。現在に至るまでに関わった多くの方々に対して、感謝の気持ちを忘れてはいけな

い。しかし、先人の作ってくれた井戸ばかりに頼っていたのでは、いずれ水は枯渇してしまう。私たちは、福井大学教職大学院拠点校として大学との連携を深めていくことで、今まで築き上げてきた学校文化を生かしつつ、生徒がより学校を好きになるよう、さらに、様々なことに対して自ら「やりたい」と積極的に関わっていけるよう、今の時代に対応した、あるいは時代をリードするような教育実践を教師と生徒が一緒になって展開していきたい。

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

立ち止まって考える

授業研究・教職専門性開発コース2年/附属義務教育学校前期課程 新谷 輝

「M2になってからカンファレンスの捉え方が変わった」, 「将来, 組織を運営する上でM2会議は大切な経験になっていると思う」

昨年の中頃, M2・3の先輩方とお話させていただいていると, このようにM2会議の話題が上がるが多かった。当時, M1だった私は, 「そういうものかな?」や「長期実践報告書に書くほどのことかな」といった考えであった。それは, 週3日の長期インターンシップとカンファレンスの繰り返しという日々の中で, 十分に立ち止まって考える余裕がなかったからなのかもしれない。

M2になると, 木曜カンファレンスの後に, 「今後の木曜カンファレンスをどうしていくか」を話し合うM2会議に参加することになった。会議という, どうしても堅苦しい印象になってしまいがちだが, 「皆でよりよいものをつくる(考える)にはどうすればよいか」がその場では, 話し合われるべきだと思っている。そういった思いも反映されてか, 全体の間では, 会議の内容と同時に, 話し合いの形態も考えてきた。

しかし, 会議を行う回数を重ねるごとに, 院生の「一人一人の意識の違い」や「一人一人が大切にしているものが異なる」ことに気づき始めた。その状況で, いかに目的意識をもって, 皆で足並みを揃えてやっていくべきかを考えることが, 私の中での課題となった。私は, 人見知りで控え目という自分自身の性格もあってか, こういった会議の場において, 率先して皆の前に出て仕切るということが, あまり得意ではない。しかし, そんな私が, この大学院で必要不可欠である会議に, 「どのような形で参

加していくか」を考える中で活路を見いだしたのは, 「M2の中で自分ができる役割を見つけ, 徹するように努める」ということである。

私は, M1の間から, カンファレンスと同時並行で行っている長期インターンシップにおいて, 「子どもたち一人一人が求めている関わり方」について考え実践することに努めてきた。子どもたちが, 普段の生活の中で, 「どのようなことを考えて, それをどのように表現するのか」ということを, 表情や言葉, 行動から, 文字通り“子どもの目線”で考えるようにしている。こういった経験もあってか, 会議という場においても, 「全体の話の流れを客観視しながら自分の考えを伝えられる」立場にしようと考えた。

しかし, この立場にしようと思うと, 一旦, 他のメンバーとは違う視点に立ち, 全体の流れとは異なる方向で考えを進めていく必要が出てくる。「全体の和を乱しかねない」という思いもあり, この立場にいてもよいのかという迷いも自分の中で出てきたのだが, 「考え方や話し合いに参加する視点はいろいろあった方がよい」という同期のメンバーの姿勢に後押しされ, 今日まで, この役割に徹することができた。

M2の今の立場になって改めて, 「いかに当時の自分がこの教職大学院において受け身の立場であったか」が思い起こされる。目まぐるしい日常の中でも, 「何をしたら自分の学びになるか」ということ, さらに「どのような時間が他の人たちの学びにつながるか」ということを, その都度意識することが必要なのではないかと考えるようになった。

ミドルリーダー・マネジメントコース便り

『長期実践研究報告』の執筆にむけて

学校改革マネジメントコース2年/なかよし保育園 岩倉 直美

11月の合同カンファレンスで、執筆スケジュールの目安をもらった。いよいよ書いていかなければならないと思った。

入学当初、毎回変則的なメンバー構成での合同カンファレンスに、話し合いの視点を幼児教育の立場からは、どのように話したら良いのかと考えると、話しづらいと思うことがあった。でも繰り返しグループメンバーの話を聴いたり、自分の思いを話したりしていくと、話したいことが整理されて話しやすくなり実践の振り返りなどもでき、校種は違っても子どもへの思いや教育はつながっていった。また無意識だったコミュニティや組織について、出会うことのない専門書を読むことで保育実践の中にも存在することを学び、読み解ける部分があるとおもしろかった。

合同カンファレンスの後に提出してきたメモ程度のレポートや集中講座の後のレポートは、執筆に必要な記録・資料の一部となり、読み返しながらかきたいことを構想する糸口を見つけることができそうだと。さて私が書きたいと考えてきたことは、乳幼児保育(教育)に携わっての長い年月の中での、自分の足跡や保育実践の振り返りをして、学んできたことをまとめていきたいであったが、連合教職大学院では新たな扉を開くような体験と学びをすることができた。私にとっては激動の2年間である。激動などというと「大袈裟な。」と思われるかもしれない。その激動とは予想していなかったことで、越前市の私立園に37年間勤務していたが退職し、園長として勤務する為に福井市の私立園に6カ月間勤務したが組織のあり方に納得がいかず辞めた。その後は越前市の公立

園で非常勤保育士として勤務したことである。連合教職大学院の在籍条件が現場での勤務と実践だったのでどうなることかと思ったが、この勤務先が代わったことは実践の学びの幅を広げたと思った。

園をマネジメントすることは、一か園に長く勤務した中で園長の思いに寄り添いながら、子どもと共に保育にどっぷり関わった保育士時代。主任保育士になってからは、若い世代とコミュニケーションをとりながら信頼関係作りや中堅保育士と連携して保育の質を高めることを目指して、園長と園内研修の充実を図っていった。

他園に勤務したことから、環境を通しての保育といわれるが、その環境にもいろいろあることや子どもの心の育ちを大切にしている保育は、子どもに安心した生活や夢中になって遊びに向かう力の中に様々な学びを育てているということに気づかされた。このことを保育実践の中から探ることができたときには、保育の喜びを感じた。園を運営し組織を確立していくことを考えたときは、職員を育てる体制作りが必要だと思った。チームを作ることを意識して働くことが求められる集団、職員が個性を発揮させながらもみんなで協力して保育を創り出していけることが楽しいものと感じられることができる実践などは、大人の関係性の中でも、子どもと共に創り出す保育の喜びを見いだすことができる。

『長期実践研究報告』執筆の構想イメージを簡単に述べてみたが、具体的な内容を文章化するには記録や資料を読み返し省察していくことを心がけて取り組んでいきたいと思う。

実践と省察の繰り返しのなかで

学校改革マネジメントコース2年/福井県教育総合研究所 塚田 孝子

「やったことしか力にならない。だからたくさん 練習して一つひとつの技術を身につけていくしかない

い。」

これは、中学校で部活動を指導していた時に、生徒達に繰り返し話してきた言葉である。自分自身も教師生活の中で、「実践」を積み上げていくことが教師としての力量向上につながると、授業や生徒指導などの「実践」を大切にしてきた。しかし、教職大学院で学びを深めていく中で、「やっただけでは力にならない。」ということを実感するようになった。力にしていけるためには「実践と省察を繰り返していくこと」が不可欠なのだと。

教職大学院では、毎月のカンファレンスでお互いの実践を聴き合うセッションがある。そこで、お互いの実践を「我がこと」のようにとらえ、聴き合うことで学びが深まっていくことを実感している。ちょうど1年前に東京ラウンドテーブルに参加した時に、同じグループになった大学の先生から「相互主体性」というキーワードを教えていただいた。「どちらかが主でどちらかが従ではなく、教師と生徒であれば生徒が主体的に学ぶことで教師も主体的に学べる」ということだと教えていただいた。この「相互主体的な学び」が教職大学院での学びなのだと納得した。実践を語り、聴き、対話しながら考えを深め、記録する。この繰り返しの中で「省察」が生まれ、次の実践につながる。教職大学院で学びながら実践を重ねる中で、このサイクルが今の自分の実践につながっていること、そして、現在長期実践研究報告に取り組む中で、教師としてのこれまでの取り組み、さらに自分が生まれてから今までの成長過程での経験が今の展開を

支えていることを改めて感じている。

私は子どもの頃から書くことにあまり抵抗がなく、折に触れて手紙を書いたり雑誌に投稿したりしてきた。日記も25年以上毎日書き続けている。仕事でも学校や研究所の研究紀要を書いたりコラムを書いたりしてきた。今それらを読み返すと、その時々実践と省察を繰り返してきたのだと感じる。そういうこともあり、長期実践研究報告を書くことにはプレッシャーは感じるものの、それ以上にわくわくした気持ちで楽しみながら取り組むことができています。これまでの人生を振り返ったとき、「あの時のあの場面が今のこの実践につながっている」、「今の自分の教師としてのあり方は、あの時期のあの実践が影響している」、「教師としての重要な転換点は、あの先生との出会いだ」ということが意識化されてくる。まさに、人生で出会う人、経験することには全てに意味があるのだということを感じている。

教職大学院での生活もまとめの時期に入った。冬期集中講座を前に寸暇を惜しんでパソコンに向かい、ひたすら今までの実践を文章にしている。冬期集中講座でそれらの実践を省察しとらえ直しをしていくこと、そしてその日その日の語り合い、聴き合いの中で「相互主体的な学び」を深めていくことがとても楽しみである。この教職大学院での2年間の学びを通して、次の学びへの展望をいかに開いていけるか。来年からの教師としての新しいチャレンジにつなげていきたい。

長期実践報告書作成を目前にして

学校改革マネジメントコース2年/奈良女子大学附属小学校 西田 淳

いよいよ長期実践報告書をまとめる時期となりました。分かっているながら、なかなか手が付けられていないのが現状です。みなさんは見通しがついておられるでしょうか。

改めて「私にとっての『学校改革』とは何か」と考えた時に、「奈良女子大学附属小学校の改革」という視点では報告書をまとめたくないのだという自分があります。確かに、現在の国立大学法人の附属学校が抱える問題は少なくありません。「統合」や「廃止」などという声も聞こえてきます。本校にとっても避けては通れない大きな問題です。また、本校も若手教員が増えた現在、研修のあり方の見直し、公開研究会の持ち方は今まで通りでよいか、

「奈良の学習法」をどのように継承していくか等々、課題は山積みと言えます。それらについて、具体的に動き始めていることもあります。しかし、それよりも長期実践報告書では、「これからの学校はどうあるべきか、学習はどのようなものであるとよいのか、そして教師はどうあるべきか」という視点での「学校改革」について考えたい自分がいます。

それは、他校の先生方に自分の経験やこれからの国語学習のあり方、自律的な学びなどについて語る機会を多く与えていただいていることにも関わります。そのような機会を頂けることは本当にありがたいことです。私がお話する内容は、公立学校の教員

としての15年間で悩み続けてきたものと、その答えを本校に来て見つけることができたこと、本校での10年でまた新たな課題に直面していること、この教職大学院の学びで明らかになったこと等、それらが一体となって創られています。だからこの機会に、一つひとつをふりかえりながら報告書にまとめることで、多くの若い先生方や本校のこれからを支えることにも繋がると考えているのです。

長期実践報告書では、「資質・能力の育成」に視点を置いたこれからの教育や学校のあり方について考えたいと思っています。これまで多くの学校現場では、どうしても「内容をどう教えるのか」という視点になりがちでした。長きにわたり、「その時間、その単元で」という短いスパンで、しかも「教師が何をどの様に教え伝えるのか」を考えることが中心となっていたため、「子どもがじっくり考える、互いに伝え合う中で新たなことに気づいていく」という学びのあり方に対して違和感がある教師も少なくはないでしょう。「それでは『資質・能力』は育たないのです」と丁寧に伝えていくしかないと思っています。そして、具体的な子どもの姿を通して理解を深めてもらうことが伝わりやすい方法だとも考えています。

そのため、まず、具体的な子どもの様子が分かる資料を提示しようと心がけています。子どもの具体を示すことができるのは、私たち実践者の特長だと考えるからです。ノートや授業記録を持参して子どもの生の記録を見ていただいています。エピソードを切り取って話すこともあります。実際の子どもの様子が見えるので、伝わりやすいのです。

次に、他校の実践を目にすることを勧めています。何らかの新たな気づきがあるからです。良ければ本校の研究会にも来てくださいとも伝えます。これは、1つの学習のあり様として、またその中で育つ子どもの姿として、観て、考えていただければ良いと思っているからです。

そんな中、先日、ある学校での国語学習を参観させていただきました。1年生の子どもたちが、自分の思いを詳しく話していきます。発言は一言で終わりません。次々と子どもたちが自分の考えを話していきます。先生はそれを温かく見守り、じっくり聞きながら学習が進んでいきます。本校に参観に来て、「附属小学校の子どもたちだからできる」とおっしゃる先生方に、この様子を観ていただきたいかったです。2年目の若い先生の実践でした。公立学校の子どもたちも、本校の子どもたちも1年生の姿は同じです。教師のじっくり聞く姿勢と、子どもたちが学習を進める中心にいるという考えがあれば、「よく考え、よく話す子」は育つのです。

自分が歩んできた道のりをふりかえってみても、「人を育てる」ということは、本当に難しいです。この教職大学院で読んだ本から、そして多くの方のお話から、「人を育てる上で何が大切なのか」ということ改めて考えました。自分もまだまだ道半ばです。もしかすると永遠に答えが出ないままかもしれません。そんな私ですが、経験を生かしながら、今後も若い先生方の何らかの助けになれるように益々精進したいと意気込んでいます。

長期実践報告書作成を通して、また新たな気づきに出合いたいと考えています。

11月 月間合同カンファレンス報告

11月合同カンファレンスに参加して感じたこと

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 竹本 瑞季

11月の合同カンファレンスでは、午前中「他校の研究から学び、他校の研究を支える自身の経験と取り組み」というテーマで進み、午後は長期実践報告についてどのように書いていくのかを話していった。

「他校の研究から学ぶ」では、興味深い話が2つあった。1つめは「子どもたち同士の関わり」をどうやって進めていくかについてだ。富山県の堀川小学校の4年生の算数の授業を見てきたという院生の話を

聞くことができた。子どもたちが「垂直と並行がつくるもの」について話しているのを先生がじっと見て待っているのが印象的だったそうだ。このお話について「待つ」というのは「先生も子どもも育っていないとできない」「先生と子どもとのやり取りで進めていく授業のなかで、子どもたち同士が話す時間をいかに多くつくっていくかが大切なのではないか」という先生方の言葉が印象的だった。2つめは研修に

行ったときや言ったあとの共有の仕方についてだ。研究会では発問などについて話すか、子どもの変容などについて話すか迷うという先生のお話を聞き、私も同じように感じたことがあると思った。授業を見るとときに焦点を決めて見ると話し合うときも話しやすいと話される先生の言葉が心に残った。狭成幼稚園の先生は他の幼稚園や保育園に研修に行ったあと、報告するだけで終わっていたが言葉で伝え合うように変えてみるとより伝わりやすくなったと感じたと話されていた。また、若手の先生が研修に行ったあと、パワーポイントを使って説明していたと話す先生もいて、さまざまなタイプの伝え方があることを知ることができた。

長期実践研究報告の進め方について話していったときに心に残ったのは、「反省」だけになってはいけ

ないという言葉だ。その反省がどこから生まれてきたのか、なぜそこにこだわり反省するのか、なぜ反省が起き、どう変化したのかなどについて考えていくことを心がけて書いていくようにしたい。また、「人の授業を見て気づくところは自分が出来そうで出来ないところ。全く自分が思っていないところには気づかない。」という言葉にもハッとさせられた。授業を見ていて、これからの自分の授業について考えることはあっても今の自分の授業観について考えることはあまりなかったように思う。授業を見ていて気付いたところから自分が授業をするときどのようなところを気にしているのかも一度考えてみたいと感じた。長期実践研究報告を書き進めていくときにもそれを活かしていけたらと思う。

最後の合同カンファレンスを終えて思うこと

授授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 谷口 貴一

11月10日に行われた合同カンファレンスが、大学院最後の合同カンファレンスとなりました。少し合同カンファレンスについて振り返りたいと思います。入学当初は現職の先生方と同じテーブルを囲んで話すことに抵抗がありました。「経験豊富な先生方を前に、私は何を話せばいいのだろう。経験豊富な先生方と話す合同カンファレンスに何の意味があるのだろう。」とほとんど経験の無い自分の思いや実践を先生方に伝えることを不安に思ったり、カンファレンスに意味を見出せなかったりしていました。しかし、今は経験豊富な先生方の実践を聴くことはもちろんのこと、自分の実践や学びを発信していくことにすごく意味を感じています。このように感じられるようになったのは、3つのことからです。

1つは経験の少ない私の話でも、いつも真剣に聴いてくださりコメントを返してくださる先生方に出会えたからです。そのような先生方に支えられ、自分の実践を発信していくことに恐れを感じなくなっていました。

もう1つは、先生方の共に考えようとしてくれる姿勢です。経験の少ない私のような院生の思いも大切にしながら実践に対するコメントをくださる先生方からは、教えようとするよりも共に考えよう

とすることを大切にする雰囲気を感じました。そのため、先生方からのコメントやアドバイスは押し付けられたものではなく、自分でもう一度考え直す材料として受け止めることができました。

最後は、先生方の実践の中に自分の悩んでいることや取り組みたいと感じていることなどの共通する点を見つけられるようになったことです。先生方の実践がはるか遠くにあるものだと感じていたのですが、小さな共通点を見つけられるようになってからは、そこを糸口に先生方の実践から学ぼうと考えられるようになりました。

このように、多くの先生方に支えられ私のカンファレンスでの学びは充実したものになっていきました。私も、子どもにとって考えや物事の価値を押し付けようとせず、共に考えようとする教員でありたいと思います。また10年後、20年後に私よりも若い教員が悩んでいるときも大学院で出会った先生方のように、よい聴き手になり共に歩むべき方向を考えることを大切にできる人でありたいと思っています。

12月に入り、今年も終わろうとしています。長期実践報告書の執筆はこれからです。私のこれまでもを振り返り、これからに繋がる長期実践報告書になればいいなと考えています。頑張りましょう！

カンファレンス報告

授学校改革マネジメントコース2年/高浜町立高浜小学校 佐藤 公豊

11月合同カンファレンスのテーマは、「他校の研究から学び、他校の研究を支える」であった。

冒頭、西田淳先生（奈女大附小）から「若手教員の育成」についての全体発表があった。若手教員の悩みとして、「教師が説明することばかりに視点がいつてしまっている」ことがあげられる。何を、どのように教えるかではなく、子どもたちがどう読んだのか。何を感じ、何を学んだかが大事である。教え、伝えることの意識改善が必要で、何よりも子どもたち自身が、書く・話す・聞くことが楽しいと感じられるようにしなければならない。そのためにも、学校として統一した取り組みが功を奏す、と話された。

恥ずかしながら、私もよくやるパターンだ。参観授業になり、緊張すればするほど多弁になり、めあてを意識しすぎて上手くまとめようとしてしまう傾向がある。教師がやたら話をしてしまうことで子どもたちの意見が聞かれず、授業内容に深まりが感じられなくなる。教え込もうとしてしまうのだ。小学生を相手に、上手く丸め込もうとしてしまっている。これがいけない。主役である子どもたちを生かせるように、教師はあくまでも裏方に徹する必要があることを、今さらながら再認識した先生の話の内容であった。

嶺南教育事務所で行われた今回のカンファレンス、まずは安田先生（遠敷小）、城谷先生（高浜中）から小浜市の取り組みを聞いた。小浜市は、毎年独自の研究指定校があり、「浜教研」と呼ばれる研究会で事前に模擬授業を行っている。今年度は、今富小学校で国語・道徳の授業実践が行われ、課題の与え方、コーディネート力、振り返りを大切にするという視点から授業研究を行ったそうだ。事前の模擬授業の際には、教師が児童生徒役を行い、全員がその授業に対して関わるのだというお話も聞かせていただいた。また、小浜市の「3S学習」（①チャイムが鳴ったらすること、②本時の新しい仕事、③次時の計画）に基づいた取り組みを聴かせていただき、『教師のしかけ』の大切さを改めて感じた。教職大学院の松田先生からは、そういった市をあげての取り組みがあるからこそ、小浜市の全国学調の結果がよいのだろうというお言葉もあった。

山岸先生（東浦小）からは、昨年まで勤務されていた松陵中のお話を聞いた。当時の校長先生の発案で、

不要なものをなくす、会議を減らすことに徹底して取り組まれたそうだ。研究会や職員会議も極力なくし、学年部会や教科部会でそれらを補った。そうすることで多忙化解消になり、ゆとりが生まれて職員の仲も深まり、授業をお互いに見合える機会が増えたそうだ。結果、学力も向上し、大規模中学校として県で上位の成績を取めるに至ったとのことのお話であった。

“校長が学校をつくる”と聞いたことがあったが、正にそうだったのだと実感を込めてお話しされた。

斎藤喜博氏の著書「学校づくりの記」を思い出した。校長先生のリーダーシップにより学校改革が進んでいく様は、その環境の中で働く職員にとってはやりがいを感じるし、一体感が生まれ、さらに相乗効果を生み出すのであろう。形は違うものの、冒頭の西田先生の言われた学校としての、「統一した取り組み」もこれにあてはまると思えた。

私の勤務する高浜小でも、この春から新校長を迎え、変わり始めてきている。（決してこれまでを否定するわけではない。）その一つに「互見授業」がある。自分の空き時間に、短い時間でもよいので他学級・他学年の授業を参観して、よい所を自らの授業に生かそうという取り組みである。新採用教員、2年目の教員がいる本校では、こうした若手教員の育成も大事な取り組みである。ベテランや中堅から学ぶこともきっと多いであろう。逆に参観される側にとっても、その視線はよい刺激となり、いい加減な授業ができない雰囲気をもたらしてくれる。つまり、相乗効果をもたらせているのだ。さらに、本校は気がかりな児童も多く、手をやいている現状もある。そういった子どもたちに対して、複数の教員の目があることは、学習指導・学級経営上においても効果は大きい。互見授業の取り組みが、子どもたちに落ち着きを生んできている。これも、狭義の「他校を知る」が生かされているのだろう。

さて、「他校の研究から学び、他校の研究を支える」のテーマの元、他校の取り組みを聞く（知る）機会を得た。現状で満足せず、「井の中の蛙」となってしまうために、こうして他校の実践を知って自分の職場に生かしていきたい。そのためにも、積極的に他校の研究発表会や授業の参観に出向いていきたいと思う。

さくら認定こども園公開保育報告

変革の歩みに立ち会う

～さくら認定こども園公開保育に寄せて～

福井大学連合教職大学院 准教授 岸野 麻衣

保育の在り方を見直し、変革していく。私立園の大きな挑戦である。保育者が決めたことについて、子どもがよく聞き、その通りにしていく保育では、できあがる作品は見栄えがよく、子どもたちの行儀もよく見える。それに対して、子どもの思いや考えを大事にして環境を構成し、子どもたちの働きかけに応じて展開していく保育では、すぐにはいわゆる見栄えにつながらない。しかしそこでのさまざまな試行錯誤にこそ意味があり、子どもたちは「ああでもない」「こうでもない」と自ら材に向かっていき、いろいろなことに感じたり気付いたり、試したり工夫したりしていき、深い学びにつながっていく。もちろん、そうなるためには、保育者が子どもの思いや考えに頭を巡らし、ことばや動きを読み取り、かかわっていくことが不可欠である。何をどこまで用意し、いつどこでどんな声をかけるか、わかりやすい「正解」はなく、迷うことが余儀なくされ、難しいものである。きっと、あらかじめ考えた通りに指示をするほうが遥かに楽だろう。

さくら認定こども園では、今まさにその挑戦をしている。今回、公開保育に参加させていただいて、昨年度の公開保育に比べると、子どもたちが自分たちなりに試し工夫し考えていく姿が随所に見られた。たとえば、ビニールで作った衣装にボンドを付けてビーズを張り付けていく子どもたち。やみくもに貼るのではなく、花の形をイメージして、ボンドをどれ

くらいどうつけるか考えながら作っていく姿が見られた。牛乳パックで船を作り、割りばしを付けて輪ゴムをかけ、スクリューを作っていく子どもたち。水を張ったタライに浮かべてみて、船を動かしてみる。壮大に牛乳パックを貼り合わせて大きな船を作った子は、いざ水に入れてみるとスクリューの位置が悪く浮かばない。もう一度製作コーナーに戻って作り直す姿が見られた。活動を進めていくと、友達とぶつかることも起きうる。感情をぶつけあうだけでは却って悪化していく場の中で、何が起きたのかを言葉にして伝え、悔しさやイライラの感情を調整しながら、自分たちなりに関係性に折り合いを付けていく。そんな衝突があっても、やりたい思いを持ち続け、実現に向かっていこうとする姿が見られた。

変革には、当然ながら時間がかかる。子どもたちが遊びの中で学びの芽生えを育んでいく保育をすでに充実させている園の先生から見ると、活動の場の構成の仕方や用いる素材、子どもたちの日ごろの遊びとのつながりなど、まだまだ検討していくべきことはあるかもしれない。それでも、こうして保育を開き、他者に耳を傾け、よりよい保育に向かっていこうとする園を心から応援したい。先生たち自身も試行錯誤しながら、協働で保育の在り方を探究していく動きは、着実に保育の質を高めていくと思う。これからのさらなる歩みに期待している。

福井市初、公開保育を終えて

学校改革マネジメントコース3年/さくら認定こども園 伊藤 仁美

平成30年度 福井市園内リーダー研修会・福井市合同公開保育として、「子どもの育ちを学び合う公開保育」をテーマに7つの認定こども園・保育園・幼稚園が公開保育を行った。福井県幼児教育支援センターが市町幼児教育アドバイザーや園内リーダーの研修を行ってきた中で、公開保育こそ保育の

質をあげるのではないかとということになり昨年度、福井市では当園が初めて公開保育をさせていただいた。参加者80名。昨年は2か園であったが、今年度は公立私立、国立と様々な園が名乗りをあげ、園内リーダー以外にも門戸を広げて希望者が参加する形になった。これも、全国に誇れる福井県幼児教育

支援センターの成果の賜物だと胸を張りたい。

こう書くと、難なく決められた線路の上を走っているようにさりと読んでいただいたかも知れないが、実は幾つもの壁があった。

公立と私立の壁。国立の壁。お互いの手の内をさらけ出すには勇気がいる。特に私立園においては、それまでの長い歴史と自信を持って築いてきた保育を見られたくないし、変えようと思わない。園内の職員への説得はどうするのか。福井市市町アドバイザーの会議でもかなり白熱した言葉のやり取りが行われた。「市の決裁が下りるのに時間がかかる。」「駐車場がない。」「誰を対象にするのか。」「敷居が高い。」「ただでさえ事務処理が多いのにどの園の誰がどこに行くのかと言う振り分けが大変。」等々…困った。

この2年の間こうした複雑な問題の中で、私の気持ちの中に少しずつ沸々と湧き上がるものがあった。福井大学教職大学院の院生として福井大学附属幼稚園や他県の園の公開保育を見せて頂くうちに当園でもやれるのではないかと、いえやってみよう。伊那小学校の先生方の前向きな学ぶ姿勢、伊那小学校の公開研に誇りを持って訪れて語り合うかつての同僚たちを見て、私の園もそうなりたい。よし、やってみよう。チャンスかも。

園の先生方には、「いつも通りにやってね。いつも通りでいいの。飾らなくていいの。」何度もそう声を掛けた。

毎月行っている園内研修。クラスに合った環境を整え、試行錯誤してきた事。全てに対して自信を持って欲しかった。全職員がチームさくらで和気あいあいと仕事している事を誇りに思っていた。当日の資料作りで職員には負担を掛けなくなかったし、指導案通りに保育を進める事に疑問を持っていたため「それまでの経緯をドキュメンテーションとして張り出そう。」と提案。プロジェクト保育(総

合学習)の流れを写真入りで大きく作成してもらい、玄関に提示した。そして感想を保護者にも書いていただいた。もちろん、親子で話し合う場面もあった。

そして、行われた公開保育の結果。案外子ども達は緊張もせず伸び伸びと活動し話していてびっくりさせられた。4歳児のつぶやき「あれ、もうお客さん帰ってもたんだ。もう1回来てほしかったなあ…」たくさんの先生方に褒められてやってよかったと感慨深いものがこみ上げてきたのを思い出す。今年は10月25日(木)9:00~15:00。参加者60名。松木健一先生、岸野麻衣先生、斎藤浩子先生の講評を頂き、小杉真一郎先生にも来ていただいて有意義に終わった。「昨年よりも質が上がった。」「先生方の語り掛ける姿勢がいい。」「子ども達がのびのびしている。楽しませてもらった。」ある園長がいくら子ども主体に変えようと言っても分かってもらえなかったのに「さくらの公開保育を見て、どうしたことかようやく分かった。」「さくらをモデル園として自分の園も変わりたい。」「さくらを見て、やれることからやろうという気持ちになった。」

公開保育を実施して振り返ってみると、子ども達に考えるよう声を掛けるようになり、大きな声を出さずつぶやきを拾うようになった。初めての公開保育をどうしたらいいのか必然的に話し合いせざるを得なかった。気が付くと職員全員正規も臨時も認め合い、見直し合い園全体が悩みながら探求し自分達を高め合った気がする。そして、参加者からそうだったんだ、と日頃気が付かない視点で教えて頂けて今後の保育への意欲が増した。子どもと同様褒められれば悪い気はしない。公開保育という共通目標に向かって学びをリードしていく事に自分の使命を感じた。

「公開保育万歳。来年も公開保育させてください。」

福井佼成幼稚園公開保育報告

～福井佼成幼稚園公開保育に寄せて～

福井大学連合教職大学院 准教授 中島 健

実りの秋の便りが、県下各地から届いていた頃。10月16日(火)に認定こども園 福井佼成幼稚園を会場に「子どもの育ちを学び合う」をテーマとした

公開保育が行われた。

当日は、各園からの参観者に加え、多くの卒園児が進学する地元の木田小学校の校長先生はじめ職員

の方々、教育委員会関係者等、様々な立場の多くの皆さんが集い、子どもたちの実際の姿から学ぶ、貴重な機会となった。

実際の保育においては、クラスの枠を超えた遊びコーナーが、それぞれの部屋に設定され、子どもたちは思いおもいに自分がやりたいことを、やりたい場所で、使いたい材料や道具を選んで遊び込んでいく姿であった。勿論、3歳児はここ、5歳児はここと指定されているわけではないので、異年齢の子どもたちが混じっている。

それぞれの部屋を担当する保育士の先生方も大変な様子。異年齢の子どもたちが、自分の思いや願いで自由に動き回るわけなので、それぞれに対応していかなければいけない。一つのクラスで、一つの部屋で、クラスのみんなが同じことをしていたら・・・とは誰もが思うことだろう。

そこには、佼成幼稚園の先生方の大きな挑戦の姿がある。「遊びの発展や学びにつながる姿にとらわれすぎず、子どもが夢中になって遊ぶ姿に寄り添い、子どもの遊びたい気持ちに共感し支える」を目的に、子どもたちの主体的な姿を、もう一度見つめ直してみよう、というのである。そして、子どもたちの主体的な姿を求めるためには、保育者の主体的な姿も合わせて求められている。

我々は、よく子どもたちが遊んでいる姿を、「試行錯誤をしていた」と称することがあるが、子ども

たちに関わる園の先生方もまた、試行錯誤の連続なのではないだろうか。先生方が良かれと思って設定した遊び場や準備した道具に、どうも今ひとつの表情を見せる子。その一方で、先生方の何気ない一言や、こういうふうに使ってくれたらと準備していた材料を、大人が考えつかないような方法で利用し、遊びに組み込んでいく子ども。でも、そんな子どもたちの様子を見守り、後に先生方同士で振り返りをしたり、次の予定を立てたりしていく話し合いは、大いに盛り上がっていく。公開保育の当日も、午後の研究会において、グループの模造紙を前に、付箋を手にした参加者の声は、予定した終了時間を過ぎても途切れることがなかった。

終わりに、以前私は、先輩からこんな話を聞いて、自分の姿を反省したことがある。我々教師は、子どもに寄り添おうと、一人の子の正面に立ち、腰を落として顔の高さを同じにし、目線を合わせて優しく微笑む。しかし、それによって見えるのは、あくまで目の前に立つ子どもの瞳であり、その子の瞳が見ているものではない。時には、その子の傍らに寄り添い、肩を並べ、顔の高さを同じにして、その子と同じ方向を向いてみよう。そこには、その子が今、まさに見ている光景が広がっている。子どもに本当に寄り添うというのは、そこから始まるのではないか。

公開保育を楽しむ

認定こども園 福井佼成幼稚園 大柳 世津子

「公開保育の在り方を見直す時代だよね、協力してくれますか？」そんな投げかけが福井市の子育て支援室からあり、二つ返事で「はい、お受けしましょう」と答えた。我が園は2年前から主体性を基にした保育に取り組んでいたもので、その成果を公開し、いろいろな視点からの意見をいただきたいと考えていた。そんな時にこの話が舞い込み、私たちにとっては絶好のチャンス！！これが第1回目の公開保育に繋がった。子どもの主体的な遊びとは何か？手探りで探すうちに“遊びを止めずにやってみよう”という発想に思い至った。登園してきた子から昼食前の11時30分まで自由な遊びを中断することなく続けた結果、やりたいことを夢中になって遊び続けるという、今まで見たことのない子どもの姿があり、職員全体が衝撃を受けた。主体性は保育者が作り上げるものではなく、“主体性”は子ども自身に内在しているという実感を得たとともに、これ

までの私たちの保育者としての役割を大いに見直すきっかけとなった。

公開保育の話に戻ると、当初は主体的な遊びの取り組みは園庭を中心に行っていた。その流れで園庭での公開保育を考えていたが、我が園の園庭には、様々な樹木や巨大なアスレチック遊具があり、子どもの姿よりも遊具のつくりや環境に目を奪われ、肝心の子どもの姿に注目しづらいのでは？と室内あそびを提案し、公開することとなった。福井市の園内リーダー研修を受けている保育者向けの公開であったが、せっかくの機会なので、近隣の木田小学校や保育所にも声を掛けた。園小接続の意図を深く組んでくださり、校長先生はじめ多数の方の参加があった。

今年度第2回目の公開保育でも同様に声を掛けた。昨年の参加の経緯があるため、快く承知して下さった。しかし、今回の公開保育では、私たち保

育者が大きな壁にぶつかった。公開保育を前にプレで園内での公開保育を行った。持ち場を決め、保育者が自分のコーナーについて主体的に動き、環境を整えた。そのこと自体は評価されるものであったが、子ども達にとっては“自主性を発揮できる場”でしかなかった。子どもの遊びの発展や先読みができるようになった分、そのような遊びに導こうとする環境を設定し、子どもの遊びの姿を型にはめてしまったのだ。その後のみんなの時間（ふりかえり）では、自分の言葉でいきいきと自分の思いを伝えるような姿は見られず、ただの報告のような感じであった。当時の様子を振り返ると、どの子どもも落ち着いてきれいに遊んでいる…何かおかしい。妙な違和感を持った。昼食後、何も設定のない保育室で各々が好きものを集めてきて遊び出した。その表情や声は弾け、輝いていた。私たちのつくった環境設定は子ども達にとって何の意味があったのだろうか？この反省から、遊びの環境設定は子ども達の思いに任せ、保育者は寄り添いと共感に徹することとし2

回目を実施した。参加者の方々からは、「自分の保育を見直す良い機会となった」「自分の学びを語り合える場があって良かった」「自分の園に戻ってから取り入れてみたい保育のやり方があった」。小学校の先生方からは、「（5歳児の姿を見て）小学校にあがってくる子ども達がどのような力を持っているかが分かった」「小中連携に合わせて、園小接続の大切さを感じた」「子どもの力を引き出せる遊びの提供が特別支援学級の参考になる」という感想が寄せられた。

公開保育をすることによって、何より学びがあるのは私たち自身である。堅苦しい理論から入るのではなく、夢中になって遊ぶ子ども達とともに私たちも夢中になって保育を楽しむこと、目の前にいる子ども達の今に寄り添ったり共感したりすることの大切さを心にとどめながら子どもの内面にある主体性を信じ、願いを持った保育者集団になっていきたい。

中藤小学校公開研究会報告

対話を通した自律へ向けて

—中藤小学校公開研究会に参加して—

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 松木 巧

先日、中藤小学校の指導主事訪問・公開研究会に参加した。この日の提案授業は1年生の道徳と3年生の算数があり、私は1年生の道徳を参観させていただいた。

本時の道徳は、「ぼんたとかんた」という教材を用いて行われていた。以下、内容を述べる。

仲良しのぼんたとかんたは、公園で遊ぶ約束をしていた。ぼんたが公園に行くと、かんたから「公園の裏山に秘密基地を見つけたから二人で行こう。」と誘われる。かんたはぼんたが止めるのも聞かず、入ってはいけない裏山の秘密基地へ入ってしまう。ぼんたはじっと考えて、「ぼくは行かないよ。だってあぶないから。」と叫ぶ。その声に驚いて、かんたが裏山から飛び出してくる。そして、かんたも自分で考えて裏山に行かないことに決め、二人で気持ちよく公園で遊ぶ。（学習指導案より、引用）

この教材を用いて、よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行えるようになることをねらいとして、本授業は行われた。その中で印象的だった場面が二つある。一つは「心メーター」を使う場面、もう一つはロールプレイの場面である。

中藤小学校の研究主題は、『一人一人が輝き、共に学び合う～対話的な「聴く」「話す」ことを通して、学びを深め、生活を豊かに～』である。授業者の先生は、話すことに個人差があるなかで、一人一人が自分の考えをもって話し合いに参加するために、「心メーター」を活用していた。これは、ハート型に切り抜いた台紙の後ろで左半分がピンク色で右半分が青色の帯を動かすことで、かんたの秘密基地に行きたいという気持ちをピンク色、行かないという気持ちを青色で表し、心の葛藤を視覚的に表すものである。

実際に子どもたちが使っているところを見ると、発表した子どものメーターとの違いを示しながら、発表する姿が見られた。また、人の発表を聴いてメーターを動かしている姿も見られた。これより、人の意見との差異を見つけて「話す」ことや、人の話を「聴く」ことで考えが変容したことを視覚的に示す一助として、「心メーター」が役立っていたのではないかと考えた。また、言葉で根拠を示すことが苦手な子どもでも、視覚的に葛藤の機微を表すことができるので、「心メーター」を動かす過程には、自分の考えを表すための自分との対話もあったのではないかと考えた。言語表現の苦手な子どもでも、こうして自分なりの考えを示すこと、それを根拠に話す友達の意見を聴くことを積み重ねて、徐々に思考や表現をするための言語が育っていくとよいと考えた。

ロールプレイの場面では、その直前のかんたの葛藤について考えた意見が大きく影響しているように感じられた。ぼんたに行かないと言われたかんたの葛藤については、「確かに危ないからやめておこうかな。」「一人で行っても仕方ない。」「大人に見つかったら怒られる。」などの意見が出ていた。また、裏山に入ると何が危ないのか、想像力豊かな意

見がいくつか出ていた。そしてこの後「下校中に走って帰ろうと誘われたらどうするか」という場面でロールプレイをした。すると「車にひかれるよ。」と、走ると何が危ないのか言える子どももいれば、「お母さんに怒られるよ。」という断り方をする子どももいた。後者は走ってはいけない理由が母親に“知られたら”怒られることにあるため、「内緒にするから。」と言われた後、切り返すことができていなかった。

これより、善悪の判断を人に許されるか等の他律的な価値判断に委ねるのではなく、自律的に判断しているかという視点が、道德教育を行う上では大切なのではないかと考えた。一年生は他律的に行動することが多いと思う。しかし他人が律してくる根拠が腑に落ちるという経験が積み重なって、自律的に行動できるようになっていくのだと思う。このような対話を通した自律へ向けて、子どもたちを褒める時も、注意する時も、彼ら彼女らが納得できるような根拠を示して諭すことを一層意識していきたい。そのためには、子どもたちの分かる言葉に関わり手が理解することと、子どもたちが自己や他者との対話ができるように言葉を育てていくことが大切だと教わった貴重な時間だった。

丸岡南中学校公開研究会報告

Open Lesson Study at Maruoka Minami Junior High School

福井大学教員研修留学生 Ugyen Dorji

I had the opportunity to observe Open Lesson Study at Maruoka Minami Junior High School on 16th November 2018 and I chose to observe Math lesson in a ninth grade. The lesson was on *Congruency*.

The lesson starts with the teacher reviewing the types of angles they have already discussed in the previous lesson. Students are provided worksheets and on it the students are made to draw angles and then in group compare different sides and angles with proof. The findings of each of the group, had to be shared to the class.

In the end the students are also made to write the summary of the class and share it with adjacent student.

When the students are made to draw angles, instead of making them connect one point to another, or instead of the teacher drawing first and the students following after, the whole process of making an angles is through a story. (Story; A fisherman wants to know the length of his fishing rod to catch a fish from the point he is standing, to the water near the rock (where there are plenty of fish accordingly another man). So he draws imaginary lines to measure the distance).

The teacher could have just drawn it on the board and made the students copy it or he could have made them draw through worksheet, but when we compare it with how he actually did, we understand the significance of the story. It arouses interest, gains students attention, relates abstract math concept to real life situation and makes student think.

I grew up with a notion that Math was mostly about formulas, equations and *how* to manipulate them to solve numericals. However, in this particular class I saw more of *why aspects* rather than *how*, which is very insightful. More reasoning and more thinking, involves higher level of thinking, ensuring better understanding of the lesson.

The students and the teacher were always on the same pace in the progress of the class. While writing, the

teacher was not drawing first and the students following but rather they were progressing simultaneously. Students knew what they were doing and were doing it independently. Apart from the drawing and diagrammatic representations, the students could also put in words the lesson learnt, as they had to share it to the class.

In the conclusion of the lesson, the teacher made use of *step-chart* to establish proof of the principle they learnt. The *step-chart* explicitly summarized the students learning with a systematic aligning of the various components of the lesson (like nature of congruent figures, conditions, proof, and conclusions). I got interested in the step-chart and would like to explore more on it and its usage in other subjects too.

Understanding ‘Learning Environment’ through Maruoaka Minami Junior High School, Fukui Prefecture

福井大学教員研修留学生 DAS SONALEECA

On 16 December 2018, I visited Maruoaka Minami Junior High School of Fukui Prefecture. I would like to present my observations through the following points.

“I never teach my pupils, I only provide the conditions in which they can learn,” Albert Einstein.

INVITATIONAL QUALITY: Aesthetics: The school stood out in the midst of small crop holdings, a big glass house, a replica of any modern museum. The brown wooden interiors and newly created paintings imparted a homely feeling. Music for transition: A deviation from ‘cell and bell’ method, music was used for transition in activities.

FLEXIBILITY: Subject-centered model: The building has been divided into mathematics, English, Special education, Social studies, Japanese, Science, Industrial Art, Music, Art, and Home Economics areas. Each area has been interjected by open space for student movement and teacher interaction. These are

media centers. The students are in motion through-out the working day. Home Base (HB): Home bases are set up next to homeroom classrooms, with personal lockers, notice boards, letter boards, tables and chairs where students can relax and switch between classes and life.

COMFORT: Light System: All the rooms were receiving natural light apart from fluorescent lights from the roofs and windows had long curtains to regulate the amount of natural light coming into the classroom. Temperature: An optimum temperature had been maintained all across the school. Air quality: The building was well ventilated and everybody enjoyed least polluted air. Acoustics: Transition from one classroom to the other was smooth and there was no unnecessary noise inside and outside the building. School lunch in the Dining Hall: School lunch was based on school’s education concept “all students watched over by all the staff”. Two different meals were served and students

had an option of using either a pink or a yellow card for different preferences.

VISIBILITY: Moments of silence after cleanliness to calm down the mind was being observed when we had arrived. **Media spiral system**: Starting from the library at the center of the school, open spaces such as multipurpose hall, as well as the media centers for each subject were connected in a three dimensional spiral, surrounded by a courtyard. **Square System**: The school incorporated group activities of students in different years, called square activities, for the purpose of fostering independence and self-reliance within groups. One class from each year was part of a different square, with five squares namely 花 (はな), 鳥 (とり), 風 (かぜ), 月 (月), 宙 (ちゅう). **Morning Reading Activities**: After arrival at the school, until the morning gathering, reading activities were held throughout the school in order to start the day in a quiet and calm atmosphere for cultivating qualities and abilities to think for themselves, actively make judgments and take action and resolve problems. **Independent study**: It was a means of exploring education utilizing the school's unique learning environment. The teachers of this school studied at graduate school of University of Fukui and the school also received graduate school interns from University of Fukui. The school had a “研究推進委員会, Research Promotion Committee”. This committee comprised of all the teachers of the school.

“We learn through our interactions and communications with others” (Lev Vygotsky). Where and how?

(i) **RESEARCH PROMOTION COMMITTEE**: Pursued the concept of ‘Communities of Practice’. Whole Study group (All the teachers belong to both the research departments). This committee comprised of- **Lesson Research Department**- This group works on developing a research lesson. Let us understand how it works. This group is further divided into three sub groups. **Nurturing Research Department**: たかだかとぶかい- This panel carried out research on activities on school motto “Students that learn independently and reach for higher goals”. ゆうゆうとぶか

い- This panel carried out study on “Students that purposefully develop own rich and strong character”. とともにぶかい- This panel worked on “students that excel at kindness, living together with gratitude for the blessings of nature and people around them. **Faculty of University of Fukui**: One faculty from University of Fukui acted as ‘intellectual neighbor’ and contributed in research lessons. The visiting teachers participate in a collaborative process of developing a research lesson.

(ii) **INQUIRY BASED LEARNING through Co-inquiry**: Social studies (Open lesson): The topic was ‘弁当会社起業かいかくしよ, Lunch Box Company Entrepreneur Plan’. Objectives of the lesson were ‘to create aware citizens on consumer rights, consumer acts and what knowledge skills to be acquired or developed in order to become a lunch box company entrepreneur’. Procedure of the class: Group discussion was carried out to identify the reasons for difference in cost of G-brand and national brand Ocha. Students came up with their reasons. The Manager of Genky of Hokuriku region had been invited as ‘expert’. He discussed about the reasons like transportation, salary, design of bottles etc. After a co-inquiry among students, teacher and experts, the students in that class came to know about one of the aspects of becoming an entrepreneur. There was mutual respect and collaboration which led to a deeper understanding of the Entrepreneurial aspect of business. The class was democratic as it was open for observation by outsiders like me.

Similar pattern was also seen in industrial arts class where the students collaborated and co-inquired to design a flower garden and eight groups came up with 8 different prototypes of the design.

To conclude it might be observed that if a school succeeds in cultivating an environment for learning, then learning would unfold spontaneously through interaction and communication, in other words collaboration and co-inquiry, among teachers and learners equally as it was evident in the functioning of Maruoka Minami Junior High School.

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2019
for Reflective Practice
and Organizational Learning
At University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2019 spring sessions

2/15(fri) 17:30-18:40
16(sat) 13:00-17:40
17(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2019.2.15-17

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
共催 社会教育実践研究フォーラム

後援 福井県教育委員会・福井観光コンベンションビューロー (予定)

実践研究 福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions

2/15(fri)

Pre-session 17:30-18:40
専門職学習コミュニティを培う
ラウンドテーブルの意味とデザイン

2/16(sat) 13:00-17:40

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校 21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
- B 教師 ①これからの地方国立大学の教員養成が進むべき方向性を問う
②学部・大学院を通じてこれからの教員養成を考える
- C コミュニティ: 持続可能なコミュニティをコーディネートする
- D 授業研究: 子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学ぶ会広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

2/17(sun) 8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00
地域や職場で自分たちの実践をじっくり語り、その省察をふまえて実践を振り返っていく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体 (コミュニティ) に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されていく。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面、言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて語って直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く育まれていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 申込は上記ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形でお願いします。受付期間は11月25日から2月12日を予定しています。
- 2/17の session IV の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

- 2/17の session IV の参加についてのお願い(午前午後全日程 (8:20-14:00) の参加をお願いします。ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いたします。

プログラムの変更等があります。
最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。
実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2019.2.15-17

Schedule

1/28 Fri 長期実践研究報告提出〆切

2/3 Sun 長期実践研究報告会

2/15 Fri - 2/17 Sun ラウンドテーブル 2019 Spring Sessions

【編集後記】

2018 年が終わろうとしています。みなさんにとって、今年はどうな年だったのでしょうか。平成最後の年末年始ということもあり、先週テレビで「平成の30年の出来事を振り返る」という主旨の番組をやっていました。今年1年を振り返ると、この30年を振り返るとでは、見えてくる風景がまったく異なってきますね。平成最後の冬の集中、スタートです。(半原)

教職大学院 Newsletter No.117

2018.12.25 内報版発行

2019.1.21 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdftukui@yahoo.co.jp